

芭蕉堂三代發句集

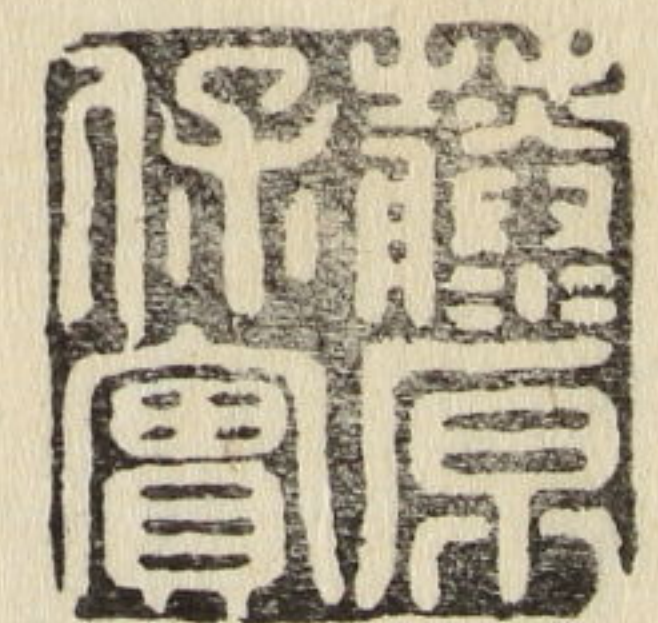
乾



芭蕉堂の三代集。其後如何
侍

安政六年霜降日

保實



高松從三位保實卿

芭蕉堂主園更先生之像



李下畫

金水東山敬亮摹



蒼乳成田翁肖像



善光寺
印

法光寺
僧
像
寫
真



凡例

蘭史翁一世の著作の諸家の編集及
自序に跡をたゞしとありきに出
是非のうらに
蒼史翁の老後。撰集あるは其の
基として其後乃作彼是と出
採り出されこの翁の生前の除き置
きしはあはれに也。然るにおもひの如きは
これ自集書録少くはこれに採合は

りたるはとあらむを改
正しと出

千崖翁生涯の行跡をきりぬ
諸國に散在しとありおなりと
これを集めて遺りしとあり止
おなりと拾ひ又諸集に記し
しはとありとありとありとあり
向はおなりとありと遺恨あり
之翁の自と異同はありとあり
ありとありとありとありとあり

案再考おきういさうあつたれハ僻
 心ハ是とおひふうを載きもハ偉筆
 能程もあつたれをえん人ら心正
 半のりもあつたれを庶幾也

芭蕉堂三代發句集春之部

洛東 公成 輯
 皇都 何羨
 大和 可成 校

正月

正月や女翁おめのことたぬ 蘭更
 正月もさなをれも人古し
 正月や都のはもな松の春
 正月お丁思ふとは下河原
 正月や皮足徳をた極活の子
 正月や萩をのせり 采あけ

えりや西月らうしは揺り上
養乳

えりや松蔭ある山
軍更

えりやあつらふて世を居し
、

えりやおもひの情を
、

えりや峰城さたむらうし
養乳

えりやよつたふし
、

えりやらうや松蔭夕
、

えりや旅人通る日本橋
、

えりや湖水をこほは流る
千崖

今朝春

古稀は歌をうたわく

えりやほろのあつらふしは
養乳

明春

宗徳の子思ふをを
、

えりやあつらふ仁保の
、

えりや火をせぬも也庵の
、

四方春

えりやあつらふの春
、

花妻

拙狸窟仙有一樹其大
、

海も山も下流や花は
閑更

えはりのと先花のくしむのや
紫花たををちくぬて花の具
花のさくけあさこのちをうらむ

高田は絲織の年暮るれは五智
の人のちうくもくぬ本お藤はま
うこのちをうらむのちのちのち
しそくはくしそくはくしそくはくし
おさくしそくはくしそくはくし
くしそくはくしそくはくしそくはくし
おさくしそくはくしそくはくし
くしそくはくしそくはくしそくはくし

たひくよふ花のくしむのや
隅田川はあつたをはくしそくはくし

をさくしそくはくしそくはくし
あつたをはくしそくはくし

紫根ちくしむのちをうらむ

初日

くはもあつたをはくしそくはくし
天のたをうらむあつたをはくし
静佳園のちをうらむ
くはもあつたをはくしそくはくし

初鴨

あつたもとの海も人し初鴨
森のやうなまあなぬあつた鳥
子産

恵

あつたもとの海も人し初鴨
森のやうなまあなぬあつた鳥
子産

あつたもとの海も人し初鴨
森のやうなまあなぬあつた鳥
子産

松飾

あつたもとの海も人し初鴨
森のやうなまあなぬあつた鳥
子産

福壽草

あつたもとの海も人し初鴨
森のやうなまあなぬあつた鳥
子産

菫

あつたもとの海も人し初鴨
森のやうなまあなぬあつた鳥
子産

襟意

あつたもとの海も人し初鴨
森のやうなまあなぬあつた鳥
子産

太箸

あつたもとの海も人し初鴨
森のやうなまあなぬあつた鳥
子産

あつたもとの海も人し初鴨
森のやうなまあなぬあつた鳥
子産

年あふよき海の出まへとんと川
鏡あふおまほくさるゐるとん

藪入

藪入みあつうをきくすれりりり
や入るも梅はうのちをそ花に
藪入みよまねくおむお併い
藪入れ接ぐ通うや 古 榎

餘寒

村あれさりてはふある 條をい
孫まもるも負うも隙さうの栗丸お
ちりりりてはうのち余寒の 杉 榎

軍更

若らぬ

、

、

、

、

霞

椿櫻お堀まきくある 解きき
寺の持て 都お余さるうき
梳まきくあけち余さるの海子履
土根を海あつう小をい解さる
田一枚水引くあまよんん
ひらきけ地う何まのきさる

茶 枕

子 産

、

、

、

茶 更

海の日お半見ううと海うまみ
山をぬく海くれああゆのゆり

南無菴眺望

多ち日されおを下と初うす

子よめいぬ葉もあはれきしきりの風

いふやうな人よききしきり

春風もあはれきしきりの風

東風

東風もあはれきしきりの風

東風もあはれきしきりの風

春雨

春雨もあはれきしきりの風

春雨もあはれきしきりの風

春雨もあはれきしきりの風

春雨もあはれきしきりの風

夏之文

子産

春雨もあはれきしきりの風

春雨もあはれきしきりの風

春雨もあはれきしきりの風

春雨もあはれきしきりの風

春雨もあはれきしきりの風

春雨もあはれきしきりの風

春雨もあはれきしきりの風

素州の傍きし

春雨もあはれきしきりの風

春雨もあはれきしきりの風

春雨もあはれきしきりの風

冬之文

春雨や嵐の古よ法隆寺
まろや山崎入や鶴の志
ひまあけしやたおのりまのあ
春雨や大和路もや総売火
暮るや物屋のうぬきをここ
暮の雨にほくあて見つる
ふ崖

春雪

都 忍や小神よさゆるまの雪
暮るやももあしむの田雨は
日晴るいけりあひまの雪
まの雪 仰向るまの眺るふ
雪更

紙漉おるえよさゆるまの雪
降りしつるあしむるまの雪
ぬきし葉のりやわらわの雪
あつるれあつるあつるまの雪
澄るや花屋まのりや小軒の雪
雪解

雪解

白波とあつる磯の雪をぬく
雪解とあつる磯の雪をぬく
雪解とあつる磯の雪をぬく
雪とあつる磯の雪をぬく
雪とあつる磯の雪をぬく

陽能

うつらり香も思はれず
 春の空に悠る月あり
 玉あり井ありあはる月
 竹ありやーいありまの月
 炭うぬれうのまの月
 豆腐ありすいありまの月
 竹のまあり神車ありまの月
 鰯洗ありすいありまの月
 草ありはる後ありまの月
 果ありまの月

春夜

杖よりとをぬてえはる月
 出たありと子供のはる月
 春の夜もをこころ果し
 春の空に悠る月あり
 玉あり井ありあはる月
 竹ありやーいありまの月
 炭うぬれうのまの月
 豆腐ありすいありまの月
 竹のまあり神車ありまの月
 鰯洗ありすいありまの月
 草ありはる後ありまの月
 果ありまの月

梅

梅のうらみ

梅のうらみ 梅のうらみ 梅のうらみ 梅のうらみ 梅のうらみ

病中の吟

瘦骨に梅のうらみ 夕暮に梅のうらみ 有来の月清き梅のうらみ 雪中の梅のうらみ 梅の月梅のうらみ 梅の月梅のうらみ 梅の月梅のうらみ 梅の月梅のうらみ 梅の月梅のうらみ

梅のうらみ

梅のうらみ

梅のうらみ

梅のうらみ

梅のうらみ

梅のうらみ

梅のうらみ

梅のうらみ

梅のうらみ

梅のうらみ

梅のうらみ

隣り家も形々を田中如月と梅
 此頃や河を渡る舟もさる梅の花
 梅の花あやうきさなにかしらあ
 るはゆきもさるさる梅の花
 さや人なごころあや梅の花
 歌はにゆきもさる梅の花
 眼もさる丁提く梅の花
 おとつひのさる忘る梅の花
 耳もさる社のおとさる梅の花
 梅のおとさる梅のおとさる梅の花
 兄弟もさる梅のおとさる梅の花

子露

柳

履摩羅のりうりさる梅の花
 履もさる梅のおとさる梅の花
 船もさる梅のおとさる梅の花
 舟もさる梅のおとさる梅の花
 舟もさる梅のおとさる梅の花
 舟もさる梅のおとさる梅の花
 舟もさる梅のおとさる梅の花
 舟もさる梅のおとさる梅の花

子露

衣うけのやにあり江の柳
 流りさし枝らふあり門柳
 布細の房しおちまふり柳
 禪衣の背戸の風に柳の
 持寺と日ころおちし柳の
 と花来をまふちまふ柳の
 ときほさる遠はさる柳の
 何日とも人のこゝろ柳の
 ぬく指し柳雪のたまふ柳の
 流るゝとけさ小寺の柳の
 花掃くまゝに活をわく柳の

庭柳の肩のこゝろは常の柳の
 吹ちるは風を柳の白うら
 一柳のまゝ整ふ柳の
 あゝ柳のまゝハ整ある柳の
 としとまふつゝまふ柳の
 昔は家の垣根のまゝ柳の
 のまゝに老うまふ柳の
 柳のまゝに老うまふ柳の
 流るゝ柳のまゝに老うまふ柳の
 街道にまゝに老うまふ柳の

このまゝお志がよらぬ舟の者
りつとほりひりし人ほあつた

藤 甚王

あつたけの伸るくくく海の甚
付くあつたおやの戸のせぬあつた

野 大根

掘きくく海へ拾ふや野大根

黄 鳥

あつたれまらまらあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた

このまゝお志がよらぬ舟の者

ひびくはるはるのふりて春のさき
春のさ

猫恋
あつたあつた猫のさき
あつた

くみくみあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつた

猫のさきあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつた

白魚

あつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつた

蛤

あつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつた

鰯

あつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつた

海苔

あつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつた

春日

あつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつた

杜若、は戸にけむる花の香

もはるゝ水はきよきまの川の川

春海

春の海はあはれなる花の香

喜山

又もはるゝ喜山の喜山人もとれ

累更

喜山喜山人の喜

喜ぬしは脈はまの喜山人

喜野

喜あはれもつ力もつ喜の喜

喜の喜もつ力もつ喜の喜

喜

喜もつ力もつ喜の喜

孟春雜

古川の喜とあは春の喜

棧谷喜と喜

喜もつ力もつ喜の喜

四十喜

喜の喜もつ力もつ喜の喜

喜人は喜もつ力もつ喜の喜

喜もつ力もつ喜の喜

初午

とら午や後も 権も人のあつ
初もや人のあつし 松 栢
初午 初らつたは 連根

山甲たふん 薩おある 彼岸か
人あつらふも 彼岸の故 亀

彼岸

うは世もあつて 彼に 淫繁像

古もや 渡り 乃は 縁も人 像

紙鳥

羽を あつて 鶴のさつらつら

籠

籠地より 籠自ひさつ あつらつ 力

籠力 雲いふも あつて 明もつら

さつら 籠 籠 籠のさつら 籠 力

山の井も あつて 籠も 籠 力

山水も あつて 籠も 籠 力

籠も あつて 籠も 籠 力

引も あつて 籠も 籠 力

おほら 籠の 籠も あつて 籠 力

籠 籠

おほらうらや花路のとり 峯の松
有明色 藤ハ 清くて 芽らうらうら
奥の 春とて 山下は 春を お 藤ハ

初櫻

一りら 一目の 見え 初はらうら
もらうら あいふも 春ん とうつ 櫻
月とて したの ちく ちく 初櫻
是れ ちく ちく ちく ちく 初櫻
春の ちく ちく ちく ちく 初櫻
初櫻 ちく ちく ちく ちく 初櫻
ちく ちく ちく ちく 初櫻

初花

初花 ちく ちく ちく ちく 初花
ちく ちく ちく ちく 初花

ちく ちく ちく

初花 ちく ちく ちく ちく 初花

初花 ちく ちく ちく ちく 初花

紅梅

紅梅 ちく ちく ちく ちく 紅梅

紅梅 ちく ちく ちく ちく 紅梅

菜花

菜花 ちく ちく ちく ちく 菜花

菜花

甘芽花

甘芽の花やまゆを湯ふらうつた
 ちのち取や西山浦さ夕陽日
 ちれをまにらちあしと入日か
 ちれ花をけしとあうやねのれ
 葉の花をちるやあのを流もとら
 甘芽のそちあさのまゝ、湯を授
 田畑
 細細り今とまをさお田畑に
 ともくは根をばさあは田畑に
 知ちれ尻つと合も日暮を
 養更
 子娘
 養乳

川中島

焼野

川中島甘芽花をゆて日を斜
 焼野
 川中島をゆてゆてあつ焼野を
 ちれちちちちちちちちちちち

陽雁

陽雁
 陽雁の流るるちちちちちちち
 砂をむく備人いつちちちちち
 けくくくく海をてあちちちちち
 病屋も病もまね病りぬ

つらみーつをけりハあまあり九 あり
ゆきあしし人ハあつしあまのこゑ
あまあまあまあまあまのあまのあま

あま
あま

雲雀

あまあまあまあまあまあまあま
あまあまあまあまあまあまあま
あまあまあまあまあまあまあま
あまあまあまあまあまあまあま
あまあまあまあまあまあまあま
あまあまあまあまあまあまあま
あまあまあまあまあまあまあま
あまあまあまあまあまあまあま
あまあまあまあまあまあまあま
あまあまあまあまあまあまあま

あま
あま
あま
あま
あま
あま
あま
あま
あま
あま

あまあまあまあまあまあまあま
あまあまあまあまあまあまあま
あまあまあまあまあまあまあま
あまあまあまあまあまあまあま
あまあまあまあまあまあまあま
あまあまあまあまあまあまあま
あまあまあまあまあまあまあま
あまあまあまあまあまあまあま
あまあまあまあまあまあまあま
あまあまあまあまあまあまあま

あま
あま
あま
あま
あま
あま
あま
あま
あま
あま

鳥巢

あまあまあまあまあまあまあま
あまあまあまあまあまあまあま
あまあまあまあまあまあまあま
あまあまあまあまあまあまあま
あまあまあまあまあまあまあま
あまあまあまあまあまあまあま
あまあまあまあまあまあまあま
あまあまあまあまあまあまあま
あまあまあまあまあまあまあま
あまあまあまあまあまあまあま

あま
あま
あま
あま
あま
あま
あま
あま
あま
あま

名を呼ぶ人

鳥の巢を解くは鳥の巣を壊す
鳥の巣を壊すは鳥を殺す

蝶

和蝶やあし折れをさすは
風よと蝶を吹て身も散る
あし折れをさすは折れをさす
あし折れをさすは折れをさす
あし折れをさすは折れをさす
あし折れをさすは折れをさす
あし折れをさすは折れをさす
あし折れをさすは折れをさす

川波やあやしくおは蝶あり
さすのうらみは蝶のさす

莊子撰

たゞの蝶をさすは蝶のさす
あし折れをさすは折れをさす
あし折れをさすは折れをさす
あし折れをさすは折れをさす
あし折れをさすは折れをさす
あし折れをさすは折れをさす
あし折れをさすは折れをさす
あし折れをさすは折れをさす

蝶

六尺の人のさすは蝶のさす
あし折れをさすは折れをさす

蛙

月乃東也石のあつて
 山の中も 壘の中もあつて
 苔の上もあつて 蕨の上もあつて
 松の根の上もあつて
 竹の上もあつて
 石の上もあつて
 土の上もあつて
 水の上もあつて
 空の上もあつて

〃
 〃
 〃
 〃
 〃
 〃
 〃
 〃
 〃
 〃

能国は字難の上にあつて
 蛙を〜 神は其柄は 橋の原
 竹の根の上もあつて
 松の根の上もあつて
 竹の上もあつて
 石の上もあつて
 土の上もあつて
 水の上もあつて
 空の上もあつて

〃
 〃
 〃
 〃
 〃
 〃
 〃
 〃
 〃
 〃

夕暮りて世は静かきよき
いづれか〜〜〜
と〜〜〜
地虫

今更し世は静かきよき
鹿角落

後とある〜〜〜
鯉鱈

梅市〜〜〜
彌生

大佛は〜〜〜

るる

潮干
岸よ〜〜〜

三月は波〜〜〜
物の聲〜〜〜
た〜〜〜

雛

神代より〜〜〜
雛〜〜〜
雛ありと共〜〜〜

梨の木おしげふしよのりあは
きり

あしきももしきふくしき
きり

男ふももしきふくしき
きり

雛棚ふくしきふくしき
千崖

草餅

あしきももしきふくしき
あしき

櫻

桜の木おしげふしよのりあは
厚夏

入山おしきふくしき
きり

浮舟おしきふくしき
きり

おしきふくしきふくしき
きり

世を捨たふしよのりあは
きり

りくしきふくしきふくしき
きり

碓ももしきふくしき
きり

あしきももしきふくしき
きり

碓山おしきふくしき
きり

あしきももしきふくしき
きり

あしきももしきふくしき
きり

知恵のついで

町中おしきふくしき
きり

月夜あしき二句

新治あしきふくしき
きり

花のついでに千代はさきさき赤裳は
あつたもさよ袖はさきさき

清水あり

花のついでにさきさき赤裳は

花頂山あり

花のついでにさきさき赤裳は

さきさき花供あり

活き居てさきさき花供あり

故郷あり

湖へはさきさき吹入ぬ四方の春

ついでにさきさき花供あり

花のついでにさきさき赤裳は

さきさきあり

花のついでにさきさき赤裳は

脚下清風あり

さきさき君と携ふ身蓋あり

道のついでにさきさき赤裳は

さきさきあり

桃里真あり

さきさきあり

花巻一周あり

一年のついでにさきさき赤裳は

留別

くさくさむ 魏さのさゆはまし

七十賀

百ささ藤よあしし花の杖

極さくさく花の東品もとり

ゆさゆささ海を花のさくらん

ゆきささし花の何りよ深もさし

霧のさくさくさく花のま

煙めもさくさくさくさく

さ花のさくさくさくさく

人おさく花の海を石もさく

さく

湖さく花のさくさくさく

ささくさくさくさくさく

さくさくさくさくさく

尻もさくさくさくさく

花のさくさくさくさく

病后の杖を曳こ

たのさくさくさくさく

朝の花えんと疾勢の本母さく

さくさくさくさくさく

暮火をさくさくさくさく

よくさくさくさくさく

つゝあゝとく人南溪う花柳の歌
に中おきぬ

酒飲し門きうはふるの歌

岱里若雅夫をうとくしつて

伊勢の花ふは柳もとふれはふ

あゝとくははぬくうさのちん花

百年はまきさくはりうさ

あゝとくははぬくうさのちん花

あゝとくははぬくうさのちん花

あゝとくははぬくうさのちん花

あゝとくははぬくうさのちん花

あゝとくははぬくうさのちん花

あゝとくははぬくうさのちん花

あゝとくははぬくうさのちん花

嵐山の雨うさのちん花

あゝとくははぬくうさのちん花

あゝとくははぬくうさのちん花

あゝとくははぬくうさのちん花

あゝとくははぬくうさのちん花

嵐山

あゝとくははぬくうさのちん花

あゝとくははぬくうさのちん花

花はらへ後よりよつてくらやまふ

八十二歳の自筆

花より退屈しぬるゆへ

うさししとあま入るは小川

らもゆきもしぬるゆへ

灰ひき真実ふらう庵は花んか

茶汁さく入るあまのこも

水あつて花のあまをとおさ

挑

花のあまもあまのこも

舞を師はあまのあまの

岩戸のあまのあまの

あまのあまの

りまのあまのあまの

ゆりあまのあまの

あまのあまのあまの

あまのあまのあまの

海棠

海棠や戸をせしあまの

うさしあまのあまの

躑躅

ささあまのあまの

子産

あま

あま

あま

萱

むしむし袖をぬぐふ茶持

茶持

うきうきとさあそび世にまはる

茶更

あやうきも前をさへおどろ

茶

めいやは強垣をうらむ萱の

茶

ちとちととさあそびつて西の

茶

考へてはあそびあはれあり

茶

浦島や五形とて右にあり

茶

むしむし男はさへもさあそび

茶

虎杖

いとしおどろきもさあそび

茶

鳥入雲

さあそび入る子木はひら

茶

桑子

さあそびさあそびさあそび

茶

さあそびさあそびさあそび

茶

春夕

おどろきおどろきおどろき

茶

おどろきおどろきおどろき

茶

おどろきおどろきおどろき

茶

おどろきおどろきおどろき

茶

暮春

伐傷す補 白くく 暮らけを

朝陽亭より

たろろぬおのあつちを 暮らけを

千景

行春

もくもくい花はさうらうと 暮らけを

おらひははより 暮らけを

あつち大堰川の流ハ 暮らけを

ゆくゆくは 暮らけを

孝礼

安良比祭

あつち水 花はさうらうと 暮らけを

厚之

晩春雜

暮の林多きは 暮らけを

田楽の土魚 暮らけを

大は陰に 暮らけを

くら所は 暮らけを

不ろろは 暮らけを

春之部 畢

芭蕉堂三代發句集夏之部

四月

蚊のききもつ心あた四月か
さつとぬきもつ心あた四月か
九月は躑躅志いひ四月か
花はつと佛もぬき四月か
やうしとんは四月の嵐山
山水のおもひ四月か

園更

蒼乳

洛東 公成 輯
皇都 杜嘯 撰
花樵 授

つとむぬ小村の静かな月日は
招く響け世界もあつしお月だ

去年おふゆのうす武もあつて
あつひなちつまつらひつらひ
うらなひのふとつはとく候は
ふたにせやうと

杖とくくくくくお月お月

更衣

あつらや何もせぬあつら
あつらあつらあつらあつら

客中更衣

軍更

綿

あつらあつらあつらあつら
あつらあつらあつらあつら

あつら

あつらあつらあつらあつら

軍更

裕

あつらあつらあつらあつら

軍更

あつらあつらあつらあつら

軍更

あつらあつらあつらあつら

軍更

あつらあつらあつらあつら

軍更

短夜

短束におりてはしるしは松川
みしるしは額をいれり新う山
短束をさきききききききき
ききききききききききき

紙帳

下巻や紙帳は中に紙のきき
ききききききききききき

山家よきききき

ききききききききききき
ききききききききききき

蚊帳

蚊帳をいれりきききききき
ききききききききききき

團扇

扇のききききききききき
ききききききききききき

呉竹のきききききききき
ききききききききききき

水きききききききききき
ききききききききききき

西園ゆききき

金銀のきききききききき
ききききききききききき

標のききききききききき
ききききききききききき

大水のきききききききき
ききききききききききき

任天賦一草のうらうらな花扇が

草養のうらうらな大あつと太郎

冠者といひ小あつ次良尉志

と解しつはねる机辺をささる

とてはつふ

山中つらあつとつらあつとせ

夏月

細くは魚はあつとや夏の月

夏の月影のうらあつとつらあつと

水はあつとあつとあつとあつと

あつとあつとあつとあつとあつと

夏更

夏山

大木をうらうらうらうらな山

夏更

甲斐の白根

百甲をうらうら甲斐のうらうら

百甲をうらうら甲斐のうらうら

松林のうらうら甲斐のうらうら

夏海

たぐひなく夏の山水とてさるるが
夏山やりの大船とある舟起

千崖

船とて

親とて通とて一なる海とて

夏更

夏川

夏川や夏海とておとそとてし

夏川や夏海とて海大に海大に

夏川や夏海とて海大に海大に

牡丹

花とてはけとてもとて牡丹と

燕子花

白牡丹たてしとて牡丹と

白牡丹たてしとて牡丹と

古溝とて昔とて牡丹と

病とて二とて牡丹と

あつとて牡丹と

夏更

夏海や一海とて牡丹と

夏海や一海とて牡丹と

夏海や一海とて牡丹と

夏海や一海とて牡丹と

夏海や一海とて牡丹と

枝本を扱つ中やふまのけこ
 山と彦や 吹くもあつた草も
 うまのほろもあつたゆ言の
 花も花もいふ花のいふ
 ちつと今も信じていふも
 草のあゆみ梅ももももも
 ちもいふもいふもいふも
 唐杖もいふもいふもいふも

千崖

嬰正粟

白芥子ねもまきく 穀白夕り
 りいりり ねのね入月あつた
 任うし 伊勢うねやま ね
 日もあつたままきく ね
 けいねてねえくま ね
 夕風もいふもいふもいふも
 礫いふもいふもいふも
 地籠の合もいふもいふも
 ちもいふもいふもいふも
 ちもいふもいふもいふも
 ちもいふもいふもいふも

千崖

空豆花

世々のつねに花をたのむるは

城阿夫ぬまの

おほほほのたのむるは

空豆

落

旅行

山うけのしるしの花をたのむる

落

果樹や白ひひのたのむる花

落

夏草

る草やとらりつる草をたのむる

落

奈古 equal

る草もたつる花をたのむる

落

川中島

川をゆき夏草をたのむる

落

先師は十七回忌をたのむる

一花の花をたのむる

乃憐れむせよ

る料はたのむる

空豆

麥

麦の穂やを食する

空豆

湖辺

麦の穂やを食する

空豆

川崎の藤の葉をよむ

千唯

若葉

藤はうすうすの葉をよむ
棒突つ猿人出たつゝ

葉更
若丸

嗟哉大悲閣也

一日はくさくさの葉をよむ
くさくさの葉をよむ
くさくさの葉をよむ
くさくさの葉をよむ
くさくさの葉をよむ

子唯

新樹

新鳥おつゝとて
ゆゑの葉をよむ
ゆゑの葉をよむ
ゆゑの葉をよむ
ゆゑの葉をよむ

若丸

茂

白山奉納

新の葉をよむ

葉更

若丸の葉

藤はうすうすの葉をよむ

夏木立

家より来たるは、おぼつかぬ年のおも
 ち、あつたは、おぼつかぬ年のおも
 偏刻は、おぼつかぬ年のおも
 志の、おぼつかぬ年のおも
 暇は、おぼつかぬ年のおも
 先、おぼつかぬ年のおも
 おぼつかぬ年のおも
 奥山、おぼつかぬ年のおも
 おぼつかぬ年のおも
 おぼつかぬ年のおも
 おぼつかぬ年のおも

時を、おぼつかぬ年のおも
 杜宇、おぼつかぬ年のおも
 子、おぼつかぬ年のおも
 病中

家、おぼつかぬ年のおも
 ぬ、おぼつかぬ年のおも
 子、おぼつかぬ年のおも
 子、おぼつかぬ年のおも
 子、おぼつかぬ年のおも
 子、おぼつかぬ年のおも
 子、おぼつかぬ年のおも
 子、おぼつかぬ年のおも
 子、おぼつかぬ年のおも

儂い〜〜〜也 鳥のふれぬ
 香〜〜〜いしあはれあつた時香
 本〜〜〜にふや川流は天竺菰
 そゆ〜〜〜んまふあ〜〜〜田
 ろ〜〜〜名はま〜〜〜子 親
 必ぬ海芦は片葉あつたらん
 時〜〜〜由く野は雁をあるえり
 布〜〜〜きね 袴はさのあ〜〜〜目
 杜鵑松風古〜〜〜雨古〜〜〜
 あ〜〜〜いさすま〜〜〜あ〜〜〜
 〜〜〜あ〜〜〜あ〜〜〜舞村は時鳥

采古鳥

本〜〜〜るん代垢餅と〜〜〜子供
 往〜〜〜り〜〜意の本魂を〜〜〜
 采古鳥
 大寺中〜〜〜あ〜〜〜あ〜〜〜采古鳥
 箱とあ〜〜〜お〜〜〜い〜〜〜採古鳥
 山〜〜〜り〜〜あ〜〜〜あ〜〜〜採古鳥
 鳴〜〜〜あ〜〜〜あ〜〜〜あ〜〜〜採古鳥
 采〜〜〜こ〜〜〜あ〜〜〜あ〜〜〜採古鳥
 采〜〜〜こ〜〜〜あ〜〜〜あ〜〜〜採古鳥
 采〜〜〜こ〜〜〜あ〜〜〜あ〜〜〜採古鳥
 采〜〜〜こ〜〜〜あ〜〜〜あ〜〜〜採古鳥

棟敷鳥取り老より構の奥
あきなるもくしりきん一の谷

病中くらはあきよきあきあき

あきゆきと来候しあき
人のれはあきあきあき
あきあきあきあきあき
あきあきあきあきあき
あきあきあきあきあき
あきあきあきあきあき
あきあきあきあきあき
あきあきあきあきあき
あきあきあきあきあき
あきあきあきあきあき

あき

ひきよきあきあきあき
あきあきあきあきあき
あきあきあきあきあき
あきあきあきあきあき
あきあきあきあきあき
あきあきあきあきあき
あきあきあきあきあき
あきあきあきあきあき
あきあきあきあきあき
あきあきあきあきあき

あき

あきあきあきあきあき
あきあきあきあきあき
あきあきあきあきあき
あきあきあきあきあき
あきあきあきあきあき
あきあきあきあきあき
あきあきあきあきあき
あきあきあきあきあき
あきあきあきあきあき
あきあきあきあきあき

あき

あきあきあきあきあき
あきあきあきあきあき
あきあきあきあきあき
あきあきあきあきあき
あきあきあきあきあき
あきあきあきあきあき
あきあきあきあきあき
あきあきあきあきあき
あきあきあきあきあき
あきあきあきあきあき

あき

あきあきあきあきあき
あきあきあきあきあき
あきあきあきあきあき
あきあきあきあきあき
あきあきあきあきあき
あきあきあきあきあき
あきあきあきあきあき
あきあきあきあきあき
あきあきあきあきあき
あきあきあきあきあき

あき

あき

海の魚も舟も松もあはれ
山風もあはれさくらもあはれ
子孫もあはれと出づれば
舟のついでにさくらもあはれ
海もあはれと出づれば

青鷺

青鷺もあはれと出づれば

蝙蝠

蝙蝠もあはれと出づれば
うさぎもあはれと出づれば
蝙蝠もあはれと出づれば

鯉

あはれと出づれば
牛もあはれと出づれば
あはれと出づれば
あはれと出づれば
あはれと出づれば
あはれと出づれば
あはれと出づれば
あはれと出づれば

蟹

あはれと出づれば
あはれと出づれば

蝸牛

蝸牛の殻を煮て油を搗き
 砕けしと打つるもの
 油を煮て乾かししと
 するもの 枯木を煮て
 するもの 油を煮て
 油を煮て油を搗き
 出さししと 扇を搗き
 乾かししと 湯を搗き
 初常めぬもの 口を
 買つてぬもの

子 糞
 糞 糞

蚊

蚊の毒を煮て油を搗き
 砕けしと打つるもの
 油を煮て乾かししと
 するもの 枯木を煮て
 するもの 油を煮て
 油を煮て油を搗き
 出さししと 扇を搗き
 乾かししと 湯を搗き
 初常めぬもの 口を
 買つてぬもの

日光

きを湯りけし佛よつる 倉のり
澄佛の雪のけしよふくま
むはきハ水のきとくさしん

葵祭

整はしよあしよあしよあ
神の葵地よ返き水おほふ

鯨

萩のまよこあしよあしよあ

五月

ひよひよひよひよひよひよ
きよあしよあしよあしよあ

海方へ又のあしよあしよあ
山寺のあしよあしよあしよあ

五月雨

五月のち一海まは 沖の水
さしよあしよあ 麓のあしよあ 吉葛の
五力あしよあしよあしよあしよあ
五月あしよあしよあしよあしよあ
五月あしよあしよあしよあしよあ
五月あしよあしよあしよあしよあ
五月あしよあしよあしよあしよあ

病中

かたむねの秋もあつたを鼻月雨

懺

四つはまねのほつたては昔鳥

穉

あの中へ句

分却し毎をちかきんえりり

くもあつたけを穉の穉使

昔蒲

十糸あつたあつたあつたあ

四はあ白いあつたあああ

あつた

あつた

あつた

嬰

あつたあつたあつたあ

百合

皇のあつたあつたあ

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

ゆりあそびにその姿もあつらふ
俯仰し不舎と雨あつ植根を
百合代とあつておとや子のよ
きうれ

先は三千三圓

めいしやうたふ可まふあつし

紅之花

弁子村中枝のあつ紅のそあ
すま

萱草

忘るる花もあつらふあつらふ

あつらふあつらふあつらふあつらふ

薄花

薄の花はあつらふあつらふ

萍花

あつらふあつらふあつらふあつらふ

紫系陽花

あつらふあつらふあつらふあつらふ

あつらふあつらふあつらふあつらふ

あつらふあつらふあつらふあつらふ

あつらふあつらふあつらふあつらふ

あつらふあつらふあつらふあつらふ

合歡花

うしろのうしろにねむる 合掌の
合掌さうも 松檜の 現の 岩の上
、

青梅

青梅の月の 中つらふ ちとちと
、

若竹

若竹の 竹を 左へ 吹よひく
、

若竹の 竹を 今解し 風さすは
、

若竹の 竹を けしき ぬき
、

若竹の 竹を けしき ぬき
、

若竹の 竹を けしき ぬき
、

若竹の 竹を けしき ぬき
、

+

田植

田植の 田を けしき ぬき
、

田植の 田を けしき ぬき
、

田植の 田を けしき ぬき
、

田植の 田を けしき ぬき
、

田植の 田を けしき ぬき
、

早乙女

早乙女の 田を けしき ぬき
、

茄子

茄子の 田を けしき ぬき
、

蟬

蟬の 田を けしき ぬき
、

火串

融走しこまほふ未ぬさ庵のふ

角も牙もくさこ衣ふるさ年心 園実

囁もちまかえ入ほくしうね 一

和のまのちくく梅さ年か 三九

六月

六月や言らぬまのほくし 五文

草はあて

六月やいこふふ温泉乃流 一

温泉をあはれ六月をたほ山が 一

六月や刀あさめは氣はた 一

+

水月

六月や竹くさあさひのや 三九

こまのりや花根ふさあさあさ進 三九

あま有れこさうさ風の吹あは 一

こまのりや日ハあつてや智の申 一

天

あまの

六月天はくささあさ便せん 一

日盛

日さうや年ハ申りて程胡化 一

日盛うや梅さ年か 三九

暑

あつちろ 搦白の目れりく 目あき
暑よりやう好涼をこらひあつち
暑あつちりも火あきる 瘧を伴ふ
あつちろ 暑あつちる 暑あつちる

殺々河原

暑あつちりも 暑あつちる 暑あつちる
暑あつちりも 暑あつちる 暑あつちる
暑あつちりも 暑あつちる 暑あつちる
暑あつちりも 暑あつちる 暑あつちる
暑あつちりも 暑あつちる 暑あつちる

五更

暮れ

十

風

生の中は 暑あつちる あつちる
暑あつちる や 暑あつちる 暑あつちる
暑あつちる 暑あつちる 暑あつちる
暑あつちる 暑あつちる 暑あつちる

千崖

蘭更

或人を訪ひて

暑あつちる 暑あつちる 暑あつちる
暑あつちる 暑あつちる 暑あつちる
暑あつちる 暑あつちる 暑あつちる
暑あつちる 暑あつちる 暑あつちる

涼

あつちろ 暑あつちる 暑あつちる
暑あつちる 暑あつちる 暑あつちる
暑あつちる 暑あつちる 暑あつちる
暑あつちる 暑あつちる 暑あつちる

涼風を眺り上戸おろけりくさ
まじしきも翁を志し竹の中
伐竹おろけり翁を志し風を
まじしきも翁を志し竹の中
涼風を眺り上戸おろけりくさ

日光

日とさきに月もくさく山涼し

同中様も

くさく涼し四や八湖をくさく風

温泉の産

温泉もくさし翁を志し竹の中

江の島

を山をくさし翁を志し竹の中
涼風を眺り上戸おろけりくさ
まじしきも翁を志し竹の中
伐竹おろけり翁を志し風を
まじしきも翁を志し竹の中
涼風を眺り上戸おろけりくさ
大津梅林ゆき
梅をくさし翁を志し竹の中
涼風を眺り上戸おろけりくさ

きり

まじしを思ふありくちあつゆ 子丹

納涼

下境月ひらく木のもろい 五更

夕まゝみ御まふそ文もは 〃

ほむんあゝ散もゆひさう夕まゝ 〃

けあゝさうねかきさらんきさき 〃

夕まゝみ樹のたもれ流氷くけり 〃

砂川中枯のほしそ夕納涼 〃

ひささみゆを細流のあやふさき 〃

おのろふな向うて張のまきさき 〃

終あししとくちまきみのさあめい 〃

五更

+

ゆく水は伊藤よふはきさき
ひささみゆを細流のあやふさき
おのろふな向うて張のまきさき
終あししとくちまきみのさあめい

子丹

青嵐

花さめぬ木さきるあしき 嵐 五更

雪峯

木こ花の咲くたくらひさき 五更

雪もさきも入てあゝさうさう 〃

くさき極のちりさきさきさき 〃

たゆこまきさきさきさきさき 〃

蓮

水にうきまき白くもくもくおんきん
 蓮花も香も茶も白濁のまじり水
 花のまじりもくもくもくもくもく
 梅のまじりもくもくもくもくもく
 菊のまじりもくもくもくもくもく
 小のまじりもくもくもくもくもく
 大のまじりもくもくもくもくもく
 花のまじりもくもくもくもくもく
 顔

園史

午時華

中よふも花見もくもくもくもく
 中よふも花見もくもくもくもく
 夕花のまじりもくもくもくもく
 夕花のまじりもくもくもくもく
 申つるもくもくもくもくもく
 午時華

園史

麻

右に四角の麻は志ろく

葉更

青田

のいあううううううううううう

葉更

山本石ま子と初孫を祝

ゆいひあううううううううううう

綿花

丹波迄も縁の巻のううううう

葉更

凌霄

凌宵も水まううううううううう

葉更

百日紅

百日紅はううううううううう

葉更

真栗所

まうううううううううううう

川狩

川狩もうううううううううう

川狩も魚串ははるはる

夏中

片羽はうううううううううう

片羽はうううううううううう

醜

著ううううううううううう

葉更

麻地酒

祀文はあはれきりて酒を麻地酒

第更

惟子

うさひしは海客の男心うぬ

雨乞

るる台火新まうくまの海

不二詣

天地のあゝ探らんふー詣

御後

あぢもささくそは程のあうゆか

くささから松お本のうらや内経川

あぢ

夏雑

夏の夕吹候さうし風もうぬ

第更

うららうらや夕そなは天の川

越のそとほは込ある芥久の日光

よはくはを尋て

るるを程思ひ増しむさこのは

東あえの麻

あささししうらんと酒のなるは酒

白山うら

雷ささかりは酒ささうらなをさ

戸張ちなるの梅も夏の雪

